

トリプルミッションモデルに基づくシンクロ・スケートの振興に関する研究

トップスポーツマネジメントコース
5006A316-2 荻田美環

研究指導教員： 平田竹男教授

本研究概要

本研究は、フィギュア・スケートの第 4 の種目であり、シングル・ペア・アイスダンスすべての技術を必要とし、芸術性・アクロバティックさを兼ね備えた、氷上のチア・リーディングと称される団体スポーツであるシンクロナイズド・スケート競技（以降シンクロ・スケートと省略する。）の振興について、トリプルミッション理論を機軸にいかに関展開すべきかについて考察する研究である。

シンクロ・スケートとは

シンクロ・スケートは、国際スケート連盟が正式種目として認めてから 2007 年で 16 年目となり、その間大幅なルール変更を幾度も経て、新しいスポーツとしての姿を形成する真只中にある種目である。世界選手権が 2000 年から既に 7 回行われ、2007 年に行われる第 23 回冬季ユニバーシアードではデモンストレーション競技として扱われるに至った。2010 年冬季バンクーバー・オリンピックでも公開競技になるのではと囁かれ始めている。アメリカ・カナダではそれなりにポピュラーな競技として定着しているが、日本においてはまったく知られていないマイナー・スポーツであり、勝利・普及・収益のいずれの領域も成立していない未熟な段階にある。

本研究の狙い

私は、シンクロ・スケート競技の日本代表チームに所属する選手として 5 年ほど活動してきた。その競技経験を活かし、本研究では、競技発展の要はトリプルミッションモデルであるという前提に基づき、勝利に向けては、プロトコルの数理的分析方法の開発と競技ルールの徹底的な掌握を試み、普及に向けては、シンクロ・スケート支援組織の設立と普及活動の事例研究、海外の事例調査を試みた。それらの活動の影響と調査結果を本研究の結果として考察し、どうすればシンクロ・スケートの市場が出来上がるのか、普及が進むのか、勝利を手に入れられるのか、本競技を通していかなる社会貢献ができるかを見通すための土台作りを容易にすることを狙いとした。

研究手法

本研究を行うにあたり、研究のための土壌となる情報を整理し、シンクロ・スケートの勝利・普及・市場の 3 領域の現状を踏まえるため、本文第 2 章において競技概要、第 3 章において競技組織、発展史について記述した。勝利追求に向けては、プロトコル分析手法 (Ogita's Reductionistic Method…ORM) の開発と競技ルール掌握を行った。ORM の開発により、数値による要素ごとの詳細で明快な分析を実現させ、その分析結果を用いて試合に臨むという実験研究を行った。

普及に関しては、Synchronized Skating Total Education & Management 有限責任事業組合 (略称: SYStem LLP) を 2006 年 9 月に設立した。また、事例研究として、東京女子体育大学チームのプロモーション活動、東京大学教育学部附属中等学校における校外学習版シンクロ教室、慶応女子高等学校におけるチーム結成活動を対象とし、普及活動の可能性を探った。海外事例としては、オハイオ州にあるマイアミ大学でのサマー・キャンプを調査した。

研究結果

勝利に関しては、2005 年 4 月の世界選手権でのプロトコルと 2006 年 2 月のスプリング・カップの際のプロトコルを、ORM を用いて分析し、2006 年 4 月の世界選手権での結果を飛躍的に向上させた。

また、2006－2007 シーズンでは、競技ルール掌握に力を入れた結果、新シーズン用の新しいプログラムが 6 月に出来上がり、7 月にはエキシビジョンなどに出演することが可能となった。これは例年に比べ半年ほど早く、チームの競技力を向上させた。

普及に関しては、マイナー・スポーツであることから賛同者を得にくく、信頼もなく、金銭的にも余裕のない状況からであったため LLP 設立に至るまで大変時間を要した。結局私と同じく選手で早稲田大学スポーツ科学科 2 年に所属する内田絢子と 2 人で設立し、2006 年 9 月に登記が完了した。

考察

勝利に関しては、短期間での妥当なプログラム構成変更が可能となり、点数が上がったことは大変喜ばしいことであった。また、どの要素が得意でどの要素が不得意であるかを踏まえたうえでどのようなプログラムにすべきかをチーム皆で意識することが出来たため、新しいプログラムを通常に比べ半年ほど早く構成できた。分析結果と競技ルール掌握の徹底により、なるべく早く構成して熟練することが必要であり、演技の好みよりも確実に点数を狙えるものを優先すべきであるということが共通認識となっていたことが、更に早期プログラム構成完了を助けた。このことにより、初夏から実演の申し込みに対応することが出来るようになり、例年に比べ格段に実力を試す場を増やすことが出来た。2006 年秋には構成時には達成できるか不安であった氷面利用距離などがカバーできるようになり、スピードや滑りに余裕が出来、2006 年冬には、スピードを維持した上でいかに演じるかを課題とすることが出来るようになった。

SYStem LLP

2006 年初夏に至るまで、NPO 法人設立の申請書を書き進めており、コンセプトは NPO としてまったく問題がなかったが 10 人以上もの同じ問題意識を共有する人々を集めることが大変難しく、仮に集まったとしてもそれぞれの思惑が錯綜して思い切った活動が出来るかに不安があった。早稲田大学での授業をきっかけに LLP の存在を知り、マイアミ大学のサマー・キャンプが刺激となり、帰国直後に設立することを決意した。書類審査などの諸手続きには、学生生活と選手生活を送りながらであったため時間もかかったが、設立後、想定よりも多くのシンクロ・スケートに関するお話をいただくことが出来ており、チャンスとタイミングに恵まれたことを大変うれしく思っている。

相乗効果と市場創出

勝利を迫及する過程でプログラムが半年早く出来上がったことにより実演回数が増えて露出が増え、結果的に普及活動が促進されたことは間違いなく、見知らぬ人からメール等で応援のメッセージをいただく機会が格段に増えていることが、普及促進の進んでいることを裏付けている。

また、普及活動により多くの方がシンクロ・スケートを競技として認めるようになり、チームを支援する気運が高ま

っていることも相乗効果のひとつと言える。今までさしてシンクロに関心を示さなかったシングルの選手達がシンクロに興味を抱くようになり、2007 年 1 月の時点で 7 級所持者が 5 名チームに所属している。

わずかながらファンやシンクロ・スケート競技者人口が増え始めたこともあり、LLP で Yahoo!オークションストアの資格を得て、グッズ販売の足がかりを作った。シンクロ教室も現時点では校外学習の一環としてしか試みていないが、有料化したプログラムとしての展開も思案中である。

今後の可能性としては、競技の難易度は様々だが、氷さえあれば老若男女、初心者からベテランまで楽しむことが出来る。また、ローラー・ブレード等を使用すれば陸上でも競技が可能である。

大学・高校などでチームが結成され、インカレ・インハイ種目となれば、学校体育での可能性もあるだろう。ショー向けのプロチームとしての可能性もあるであろうし、スケート場が増えることにより地域に根ざしたチーム結成が進めばリーグ戦も可能となるだろう。また、盲目であったり聾啞であったりする身体障害者とのチーム結成は健常者と障害者という社会形成に一石を投じる可能性もあるだろう。

スケート場がシンクロ競技をきっかけとして多くのイベントの開催される場所となれば、市場の形成が進むことになるであろう。そうしたとき、今のシングル界での選手の強さを思えば、シンクロにおいて日本がメダルを狙える可能性はとても高いであろうと容易に想像が付くが、チームスポーツを支える土壌が不十分なのが日本の現状である。1 チーム補欠を含め 20 名から構成される大所帯のチームスポーツである。大学や地域に根ざしたスケート場が出来、チームが結成されるようになれば、安定した環境での練習が望め、日本チームの世界的レベルも向上するであろう。

また、選手一人ひとりが、凜とした個を保ちつつ団体の中に溶け込み素晴らしい調和を見せるこの競技は、観る者には人間の持つ共生への可能性を示唆し、体験する者にはいかに自らの所属する団体に物事を成し遂げさせるかの術を考えさせ、団体への一体感やその喜びを感じさせる。人間が人間社会で生きていくことの意味を体感するチャンスとなりうるであろう。

本研究が競技発展の基盤形成の一助となることで本競技における好循環が成り立つことを期待し、当事者として好循環形成を今後の課題と受け止めている。